

# 読み聞かせを通して



想

隨

## 荒川サト

春風とともに明るく希望に満ちた一年生がやつてきた。黄色い帽子の一年生が入学してくると、学校全体に活気がでてくるのは例年のことだが、今年の一年生は騒々しさまで運んできてくれたようだ。めまぐるしい世相の反映か、二年前の一年生と比べてみても大変落ち着きがない。入学当初は緊張しているのが普通なのに、彼らには緊張感など少しもみえない。絶えず手足や口を動かしている。集中力がないのは当然だけど、あまりにもせわしく動きまわる姿にあきれながら、締めるところは締め、発散させるところは十分に発散させないと怪我ばかりしている一年生になりかねないと思った。

読み書きや計算などはこれが一年生かと驚くほど。知的な発達は優れて

いるのに、返事やあいさつのできない子、ささいなことにすぐ泣く子、手で物を食べる子、正しい姿勢の取れない子などが多いのはなぜだろう。注意深く相手の話が聞けないようでは、いくら知的に発達しても、学年が進むにつれて学習についていけず取り残される子がでてくるのではないだろうかと心配になる。勉強に遅れたら大変だと気にするあまりに、本来、家庭教育ですべきことをおろそかにして、学校教育でなすべきことを熱心に教え込んだ結果が裏目に出てしまつたとも考えられる。

また、この子供たちはあまりにも現実的で、国語の学習では夢がなく味気ない応答ばかりで悲しくなる。

「木が空を飛ぶなんてうそだよ」



きちんとした態度で

「こんな風船で飛び上がるはずないよ、エネルギーがないとダメなんだ」とさせたことをいう子供たち。だが、彼らは無味乾燥でせわしいだけが取り柄の子供たちではないはずである。そこで、私は、彼らの心の奥底にひそむ豊かな情感を目ざめさせ、潤いのあるはつらつとした子供たちにするために童話の読み聞かせを始めた。毎日、わずかな時間を見つけては読み聞かせるようにしてまだ日も浅いが指人形やペーパーサーなど小道具を使つたりすると、短い時間ならおしゃべりもせざじつと聞ける子が増えた。大声で注意するよりも、指人形を使つたりして語り聞かせるほうがよく理解してくれる。

「ねえ、トラちゃんの怪我はなあつて」という注文に応じて筋を発展させて聽きいっている。

「○○の出てくるこわい話をして

「ライオンがガオー」と出てくるの」などという注文に応じて筋を発展させてやると、いろいろな話のつぎ合わせになつたりして恥ずかしくなるが、子供たちは大喜び、物語の主人公になつたような気持ちで、「やったあ」とか、「まけるもんか」とか叫び出す。

まだまだ落ち着きがなくせわしい子供たちだが、物語に一喜一憂して体をぐつとり出して聞き入つて、いる顔は、やはりあどけない一年生の顔であった。

静かな放課後のひととき、彼らの喜ぶ顔を想像しながら、明日はなんの話にしようかと童話のタネを補充したり、指人形を準備したりするのが楽しみになつてきたこのごろである。

(いわき市立四倉小学校教諭)